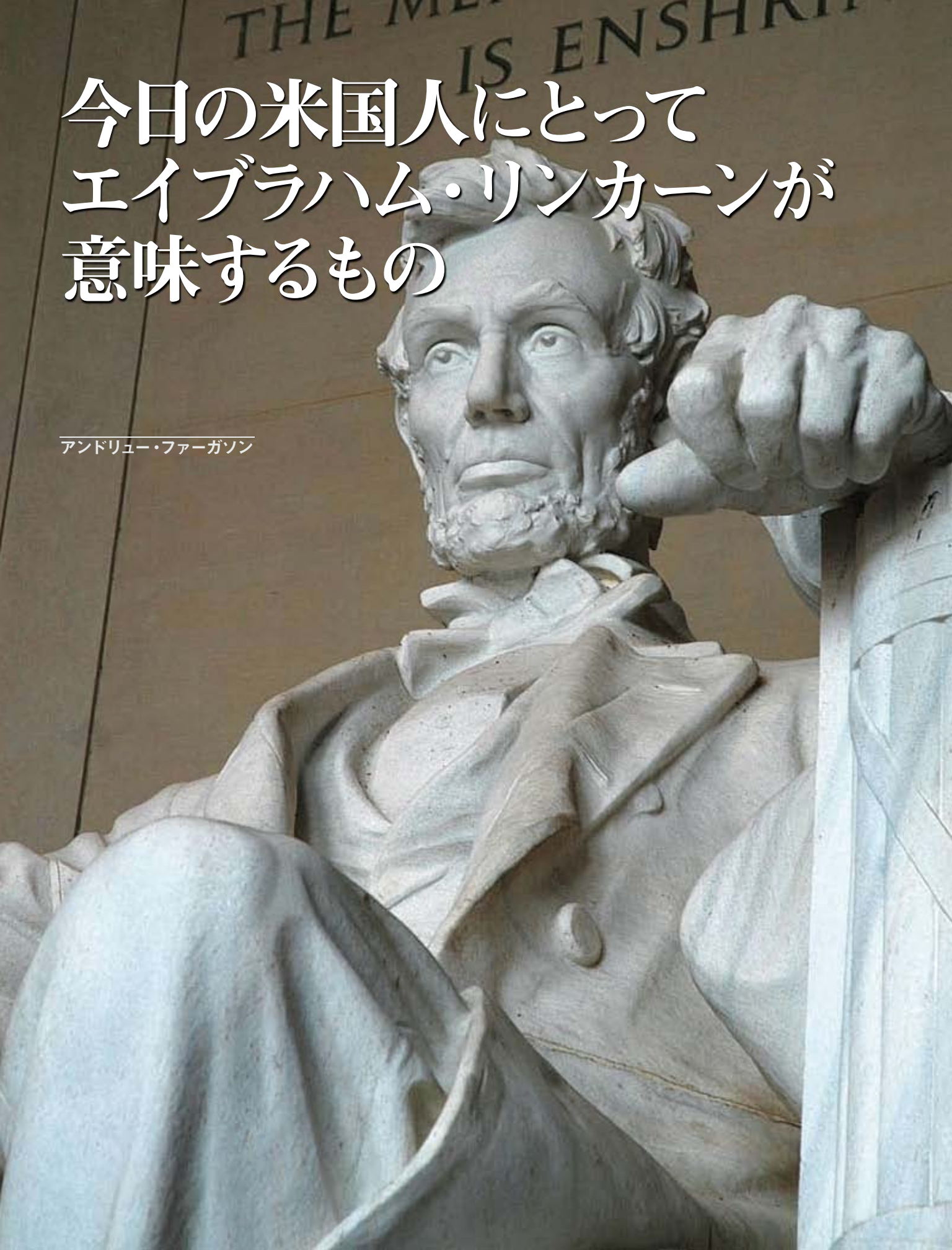


今日の米国人にとって エイブラハム・リンカーンが 意味するもの

アンドリュー・ファーガソン

「あ、そう」というのが物書きの知人の反応だった。わたしが自分の本を執筆する契約を結んだと伝えた時のことだ。「エイブラハム・リンカーンに関する本だ。まさに米国が求めているものだよ」とわたしはその知人に言った。（自分のために）公正を期して言うならば、わたしの本は正確にはリンカーンについての本ではなく、

「わたしは国民を固く信じている。国民は真実を伝えていれば、いかなる国家的危機にも対応してくれると当てにしてよい。重要なことは国民に真相を伝えることだ」

少なくとも直接リンカーンを扱うものではなかった。それでも、知人の辛辣な反応は胸にこたえた。

それにはもっともな背景があった。この知人はその数を知らなかったが、わたしは知っていた――すなわち、フォード劇場で暗殺者の銃弾により命を奪われるという不幸な出来事があってから、エイブラハム・リンカーンについて書かれた本は１万4000冊以上に上るのだ。世界中の作家が夢中になる対象としてこれを超えるのはイエス・キリストとナポレオンだけであり、リンカーンはこの２人に次ぐ。そして、リンカーン関係の本の生産はこれまでペースが落ちたことはなく、現在でも減速する兆しはない。あなたが手にしているこの１冊もそれを証明している。わたしがこうした事実を突きつけられたのは、リンカーンに関する自分の本に取り掛かってまだ間もないころだった。

1922年に除幕式が行われたリンカーン記念堂には、19フィート（約5.8 m）のリンカーンの座像がある（左と上）。この座像は現在設置されている場所で28個の白いジョージア大理石から作られた。

わたしはある週末、リンカーンの故郷であるイリノイ州スプリングフィールドで、リンカーンに関する会議に出席していた（スプリングフィールドでリンカーンの会議が開かれていない週末は珍しい）。聴衆はかなり多く、学者、作家、アマチュア歴史家、愛好家、マニア、その外見からして路上生活者と思われる数人など、およそ100人が集まっていた。会議の途中で、司会者が議事進行を中断して挙手を求めた。

司会者はこう言った。「ちょっと聞きたいのですが、ここにお集まりの方でエイブラハム・リンカーンに関する本を執筆中の人はどれくらいいますか」

聴衆の半分近くが手を挙げた。

わたしは狼狽したものの、本の執筆を思いとどまることはなかった。そして間もなく、供給過剰にあるリンカーン関係の本に、新たな１冊を加えようとする愚かな作家が直面する実際的な困難にぶつかり始めた。問題はいろいろあったが、そのひとつは、考えられる限りの事実と発見を求めて、歴史的な出来事を記録した古いぼろぼろの文書を丹念に調べなければならないことである。ときにはリンカーンについて新たな事実を見出すこともあるが、ごく小さな発見なので興味をそそられるのは専門家や目のくぼんだマニアだけにすぎない。世間の注目を集めている最近のリンカーンの本は、古い事実を集めて新しいやり方でそれを整理することで成り立っているのだ。もっとありふれた問題としては、わたしは予期できなかったが、題名の問題もあった。リンカーンについて本を書く作家はこれに

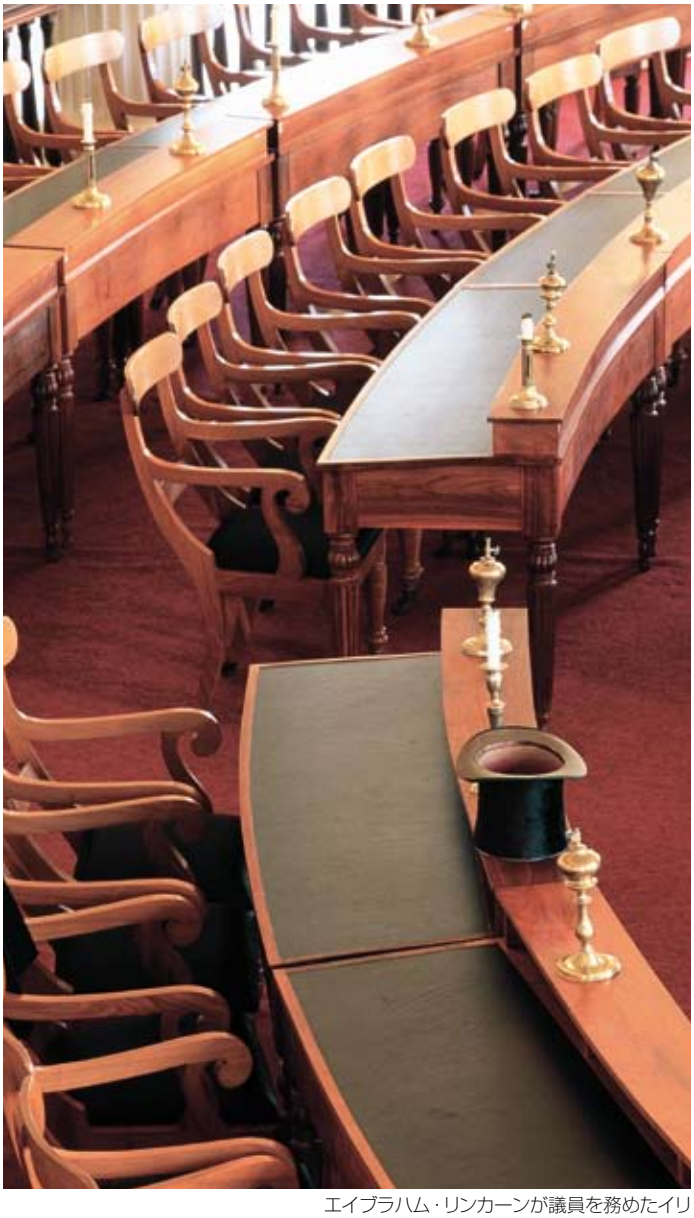
未開拓のケンタッキーにある、リンカーンが生まれた丸太小屋を想像するのは、画家たちにとってたまらなく魅力的な挑戦となってきた。

注意しなければならない。1万4000冊の本の山のどこかに、自分が選んだのと同じ題名の本が1冊や2冊はあるからだ。

活字の中のリンカーン

リンカーンの特に有名な発言からは、分離可能なあらゆるフレーズが取り出され、本の表紙に刻まれてきた。『自由の新たな誕生』もあれば『何人にも悪意を抱かず』もあり、『すべての人に対して慈愛を持って』から『人民の人民による人民のための』まである。わたしはさらに調べて、言葉が花輪のようにつなぎ合わさっていることに気付いた。まるで、リンカーンのことを書く作家はすべて、限られた数の言葉しか与えられず、それを異なる順番で並べるよう強制されているかのようだった。『The Sword of Lincoln（リンカーンの剣）』があれば、『Lincoln's Sword（リンカーンが持つ剣）』もある。『Lincoln and the Generals（リンカーンと将軍たち）』と『Lincoln's Generals（リンカーンの将軍たち）』もある。『The Inner World of Abraham Lincoln（エイブラハム・リンカーンの精神世界）』、『The Intimate World of Abraham Lincoln（エイブラハム・リンカーンの内面世界）』、『Abraham Lincoln's World（エイブラハム・リンカーンの世界）』、『Abraham Lincoln's Intimate World（エイブラハム・リンカーンが見せる内面世界）』といった具合だ。『Lincoln's Virtues（リンカーンの美徳）』、『Virtuous Lincoln（高徳のリンカーン）』もある。『In Lincoln's Footsteps（リンカーンの足跡）』、『In the Footsteps of the Lincolns（リンカーンの足跡をたどって）』、さらに変わったところでは『In Lincoln's Footprints（リンカーンの足紋を追って）』というのもあった。わたしが数えたところでは、『The Real Lincoln（リンカーンの実像）』という題名の本が3冊あり、それぞれが互いにまったく相容れないリンカーンの実像を提示していた。

こうした状況にもっと驚いてもおかしくはなかったが、そこまで驚かなかったのは、自分の著書『Land of Lincoln（リンカーンの国）』――1980年に出版されたトマス・J・フレミングの『The Living Land of Lincoln（リンカーンが生きている国）』と混同しないでほしい――のリサーチをしているとき、唖然とすることがもうひとつあったからだ。それは、あまりにも多様なリンカーンが世に出回っているということだった。わたしが少年だった1960年代初頭には、リンカーンは大きくて避けようのない存在、国全体にとっての共有物であり試金石のようなものだった。それが今



エイブラハム・リンカーンが議員を務めたイリノイ州議会上院。当時の議場はもはや日常的には使われておらず、写真にはリンカーンが使っていたのと同じ型のマントと帽子が映っている。

や、誰もが自分のリンカーンを持っているように思えた。この偉大な国家遺産がばらばらにされ、私物化されてしまったかのようだった。

この場合にも、さまざまな本がそれぞれのストーリーを物語っている。近年、リンカーンはキリスト教原理主義者であったことが分かったとする本が出版されたが、これはキリスト教原理主義者が書いた本だった。リンカーンの偉大さはうつ病との格闘から生じたとする本もあった。この本を書いたジャーナリストもうつ病と闘った経歴の持ち主だった。とりわけよく知られているのは、ある同性愛活動家が2005年に出版した本だ。この本は、リンカーンは同性愛活動家ではないものの、少なくとも行動面で同性愛者だったと断言していた。保守主義者はリンカーンの保守主義について本を書き、リベラル派はリンカーンのリベラルな面を描いた本で、彼を自由主義者だったと主張している。2003年には、今日リンカーンが生きていれば、その政治的見解は元ニューヨーク州知事のマリオ・クオモと区別が付かないだろうとする本が出版された。この本を誰が書いたかについては言わなくてもわかるだろう。

リンカーンへの熱い思いを理解する

リンカーンのさまざまな人物像が展開していく状況を見ると、好奇心に駆られて、「今日の米国人にとってエイブラハム・リンカーンが意味するものは何か」というこの文の表題となっている質問に対し、逆に「今日の米国人にとってエイブラハム・リンカーンが意味しないものは何か」という、軽薄な質問で答えたくなるかもしれない。リンカーンは一度にあらゆることを意味しているように思えるので、皮肉屋であればリンカーンは特別な意味をまっ

第16代大統領と結び付いて消えることのない2つのイメージ。リンカーンの帽子と、その肖像が印刷されている5ドル紙幣

イリノイ州スプリングフィールドにあるエイブラハム・リンカーン大統領図書館。第 16 代大統領に関する記録と資料を一般公開している。

たく持たなくなってしまったと判断するかもしれない。しかし、それこそあまりに軽薄な考え方である。というのも、われわれのリンカーンに対する熱い思いが溢れるばかりに過剰になっているところに、米国特有のものがあるからだ。この熱い思いを理解することが、リンカーンを理解するだけでなく、この国自体を理解することになるかもしれないとわたしは思うようになった。

リンカーンへの熱い思い入れは疑問の余地がなかった。それは自国の歴史に無関心と思われていた国としては驚きに値するものだった。好奇心旺盛な人たちにこれほど取り巻かれ、これほど大事にされ、いじくり撫で回されてきた米国人はほかにはいない。近代史上、おそらくナポレオンはここでも例外として、リンカーンほど信じ難いような途方もない運命をたどった人間がほかにいないことも確かだ。

だが、ナポレオンでさえ、リンカーンのように本人の振りをすることで生計を立てるような男たちの団体を生み出すことはなかった。「リンカーン・プレゼンターズ協会」（略称ＡＬＰ）はある意味では事業者団体にすぎず、例えば全米トラック運転手組合や全米製造業者協会、またはペットシッターズ・インターナショナルといった団体と変わらない。こうした団体と同様にＡＬＰは年次総会を開催し、そこで会員の交流を図り、職務上の情報を交換し、業務改善について助言する専門家の講演に耳を傾ける。しかし、ほかの事業者団体の総会とは違って、ＡＬＰの会員はいずれも、黒いフロックコートにシルクハットをかぶったり、本物かどうかはともかく真っ黒なあごひげを生やしたりという格好で集まる。総会後には、家に戻り、新たな気分で再び学校行事への出演、キワニスクラブでの講演、夏期文化イベントでの発表、地域の祭りでの演技といった仕事に取り掛かる。彼らの仕事は、この国にリンカーンを広めること。米国が今何より必要としているのはリンカーンだと考えるからだ。この団体の初代会長に、活動理由やそのこだわりについて尋ねると、彼はこう答えた。「われわれが知る必要があるのに忘れてしまっているかもしれない事柄を、リンカーンは思い起こさせてくれるからです」

ホテルの大広間にエイブラハム・リンカーンの格好をした 100 人以上の男性が集まって、「地元メディアの活用法」について講演する広報専門家の話を聞く光景から受ける印象を、言葉で言い表すのは難しい。しかしリンカーン探しをしているうちに、こうした奇異なことにも慣れてしまった。

米国人でリンカーンゆかりの品を熱心に集めるコレクターは1万5000人に達するかもしれない。あるコレクターが「本当の上物」と呼んだような、リンカーンの文書などの直接関係のある遺物の値段は近年高騰し、大金持ちの「通」にしか手が出ない。にもかかわらずこれだけの収集家がいるのだ。

しかし、そこまで資力のないコレクターも負けてはいない。特有の知恵を働かせて、コレクションの対象となる品物の質的レベルを下げた上で、より手ごろな価格が付く日用品を扱っている。例えば現在、「上物」には10ドル以下で売買されている旧リンカーン生命保険の紙マッチのカバーが含まれている。オンラインオークションのイーベイ(eBay)では、リンカーンと結び付く物は何であれ買い手が付くという。リンカーン直筆の文書は現在数万ドルで売られている。このため、金持ちではないリンカーン愛好家たちは偽造文書の売買を始めている。特に1930年代に大もうけした詐欺師ジョセフ・コージーのような有名な偽造家による文書だ。コージーが偽造した「リンカーンの手紙」であれば、2500ドルの値段が付く可能性がある。「しかしそれが本物の偽造、本当にコージーが偽造したものであると確認しなければならない」とコレクターのひとりがわたしに教えてくれた。「今、市場が過熱状態なので、偽物が多く出回っているから」

米国の実験を体現する存在

こうした憎めないこっけいさを生むこともある昔からのリンカーンへの熱中ぶりを、歴史家と社会学者は1世紀近くにわたって説明しようとしてきた。学者たちがたどり着いた理由には、独創的なものも多く、説得力のあるものさえある。リンカーンはほかのどんな歴史上の人物よりも米国人を魅了し続けているが、その理由はリンカーンがこうした偉人としては初めて普通に写真を撮られるようになった人物だからだとも言われている。このため、リンカーンは彼以前の偉人に比べ、われわれにとってより現実味があるように感じられるというのだ。またリンカーンが一般大衆に自分のイメージをどう打ち出すかに細心の注意を払っていたのも事実だ。例えば、当時としては最新の写真技術を活用していた。肖像画を描かせる機会もまず逃さなかった。こうした抜け目なさのおかげで、ジョージ・ワシントンやトマス・ジェファソンではあり得なかった形で、われわれはリンカーンを知っているように思える。

ニューヨーク公立図書館に展示されている奴隷解放宣言の原本

そうであっても、リンカーンのあの顔、悲しそうな瞳や、くしゃくしゃの髪がわれわれにとっていかになじみ深いものであるとはいえ、結局のところ、リンカーンはもどかしいほど理解し難い存在であるという主張もある。このような神秘性があるからこそ、物悲しくユーモアがあり知的で控えめで、よそよしいが思いやりがあると知人に評されるこの人物に、われわれは引き付けられるのだ、と。また別の歴史家たちは、人々がリンカーンに寄せる熱い思いは、彼のドラマのような個人的な生い立ちに根差しているとする。つまり、赤貧の中で生まれながら、人類の歴史における偉人のひとりになったリンカーンは、米国人が生得権として主張する「身を立てる権利」を体現しているというわけだ。さらには彼の不朽の名声は聖金曜日に暗殺されたからで、このショックから米国は完全には立ち直っていないという。最も冷静な理論家は、われわれがリンカーンに夢中になるのは、米国を今日われわれが知る国に造り直した南北戦争という米国史上最大のトラウマを、リンカーンが主宰し、ある意味で具現化しているからだと、分析する。

「リンカーン・プレゼンターズ」の会員の年齢やサイズはさまざまで、その姿は教室から刑務所まで幅広い場所で見られる。あるリンカーン・プレゼンターが説明するように、「リンカーンは、われわれが知る必要があるのに忘れてしまっているかもしれない事柄を思い起こさせてくれる」

これらの説明にはどれにも真実があるのだろうが、わたしは、最後の理由がさまざまなものを含む真実に一番近いと思う。わたしはワシントンＤＣにあるリンカーン記念堂からさほど遠くない所に住んでいる。「リンカーン像」が置かれた、ポトマック川の河畔に建つ壮大で写真写りのよい神殿のような建物だ。リンカーンについての自著のためのリサーチで、学者・収集家・マニアとともに時間を過ごし、そのひとりひとりから私物化されたリンカーン、自分の思い入れから断片を組み合わせて作り上げた個々のリンカーン像を説明されて、わたしはいつも、家に戻ってこの記念堂を訪れるのが嬉しかった。すべての米国人が自分のものであると主張できるこの唯一無二の揺るぎないリンカーン、不朽のリンカーンを見たかったのだ。

この記念堂は、米国大統領のための記念建造物としては訪問者が最も多い。だが、この記念堂で一番奇妙な点は、広大な階段を上り、ひんやりとした大理石の部屋に足を踏み入れる観光客を覆う静けさである。間もなく観光客たちは、有名な像の両脇の壁に刻まれたリンカーンの２つのスピーチのひとつ、または両方に注目する。片方の石壁に刻まれたゲティスバーグ演説、もう一方の壁に刻まれたリンカーンの第２期大統領就任演説を、じっと立って読んでいる観光客の多さに今さらながら驚かされる。

おそらく25万人の米国人がマーティン・ルーサー・キング・ジュニア牧師の「わたしには夢がある」という演説を目の当たりにした、職と自由を求める「ワシントン大行進」（上）から、熱帯雨林の保護を求める2人の若者（左）まで、政治変革を求める米国人は長年にわたりリンカーン記念堂で自分の意見を表明してきた。

彼らが読んでいるのは、これまでに米国人が書くことのできたどんな散文より素晴らしい散文で表現された、米国の実験の要旨である。ひとつのスピーチは、米国が、ある信条の上に、すなわちあらゆる場所にいるすべての人間に当てはまる普遍的な真実の上に築かれ、そのために献身してきたことを再確認している。もうひとつは、国の存続は何らかの形でこの信条の存続に深くかかわっていると宣言している。つまり、この国が存続できなかったとすれば、その信条自体も失われていたかもしれないということである。読みながら目に涙を浮かべている観光客もいる。むしろそういう観光客の方が多い。こうした人々を見ていると、米国人にとってリンカーンを愛することは、自分の国を愛することでもあるのだということが理解できる。

これが、今日の米国人にとってリンカーンが意味するものである。だからこそ、リンカーンは非常に大きな意味を持っているのである。

アンドリュー・ファーガソンは、ウィークリー・スタンダード誌の編集主任であり、『Land of Lincoln: Adventures in Abe's America』（リンカーンの国：エイブの米国を冒険して）の著者である。